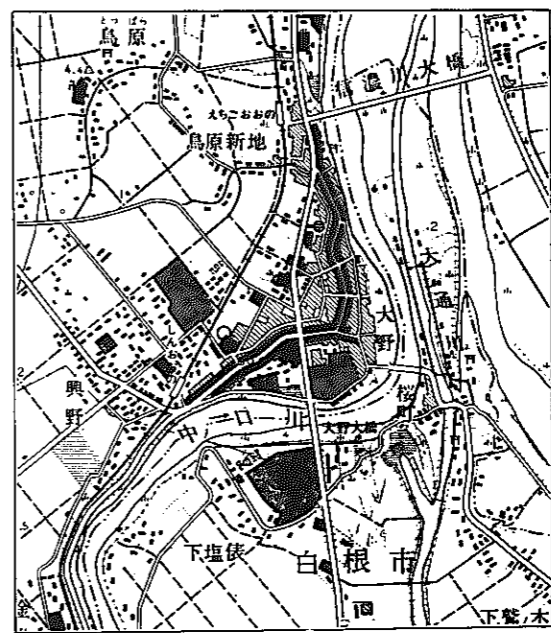


# 信濃川の増水から白根郷を守る



53年6・26水害の合流地点（28日撮影。最高水位時より40cm減水）



合流地点付近図

建設省では、無堤、弱小堤防のため浸水の危険性がある、中ノ口川合流地点の改修整備計画を立て、昨年度からその実現に向け、現地の測量調査や地元で説明会を開くなどしています。

事業内容は、中ノ口川の本市側（下塩俵、鷺ノ木桜町地内）と、対岸の黒崎町側に新しく堤防を築くもので、計画区間は国道の大野大橋から信濃川合流地点までの約二・四キロ。本市側の計画堤防延長は八百二十メートルです。

黒崎側を含めた全体事業費は、約七十五億円が見込まれ、完成までにはかなりの長い歳月がかかる事業です。本年度からはその中で第一事業区として、本市側の大野大橋から大野橋の間四百八十メートルを整備する計画です。

## 堤防高が低く危険な白根排水機場付近

計画区間は、これといった堤防がないところで、しいて挙げれば左岸は国道が。本市側は桜町から国道へぬける市道がその役割を担っていると言えます。

しかし国道や市道も、中ノ口川ぎわの家屋を洪水から守ることはできません。また、道路自体も低く、特に第一事業区となる本市側の白根排水機場付近は、水当りも強く決壊のおそれがあるうえ、堤防の高さも最も低い箇所です。標高三・七メートルしかありません。

## 能代川などの決壊で浸水は免れる

堤防の高さが三・七メートルのように危険かを、五十三年の「六・二六水害」を例にとってみましょう。（図●参照）二十五日から二十八日まで降り続いた雨は、本市でも二百六十四ミリの降雨量を記録しました。信濃川堤外地は濁流が覆い、中ノ口川沿いでは旧樋管から川水が流れ込み、本市の被害は農業関係だけで十六億円にものぼりました。

この時、中ノ口川合流地点付近での信濃川の最高水位は標高で三・一メートルを記録し、市道の上から六十センチメートルのところまで川水が迫り、住宅数戸が水につかりました。ただ、信濃川に流れ込む猿橋川や能代川が上流部で決壊したため、信濃川の水位はその後増えず、市道からの浸水は免れています。

このことは建設省・信濃川下流工事事務所でも、「上流の支川の決壊がなければ、信濃川の水位は標高四メートル以上で、堤防より四十七センチほど水位が高く、水があふれて白根郷一帯に浸水していたはず……」と、当時の危険な状態を話してくれました。

## 中小河川の改修完了で中ノ口川へ逆流することも

大津分水から関根分水までの間には猿橋川をはじめ刈谷川、五十嵐、下条、加茂、能代、小阿賀野といった、災害が記憶に新しい中小支川がたくさんあります。しかも今日、そのほとんどは改修され、信濃川へ流れ込む水量は短時間に、しかもこれまでより多くなっています。

同事務所では、「こうした状況変化から五十二年水害の降雨量が、中・下越にあった場合は、新たに信濃川の水が中ノ口川へ逆流する危険性も加わり、当時より合流地点の負担は重くなっている」と、この事業の必要性と進展に、市民の理解を呼びかけています。

① 53年6・26水害時の白根排水機場付近の水位と計画堤防

